

沖縄県青年海外協力隊を支援する会会報

第10号

〒901-2552 沖縄県浦添市前田1143-1  
国際協力機構沖縄国際センター内  
tel 098-876-6000 fax 098-876-6014  
沖縄県青年海外協力隊を支援する会  
発行責任者：事務局長 東江賢次

# はいむるぶし

(沖縄八重山地方の方言で南十字星の意 題字：故末次一郎氏)

## 協力隊は教員研修の場に有効

### 県教育庁次長らバンングラデシユの協力隊活動現場を調査

海外ボランティア活動現地調査のため、沖縄県教育庁の宮城清志次長と喜屋武浩指導主事が、十一月二〇日から二六日の日程でJICA沖縄国際センターの斉藤祐巳次長の案内でバンングラデシユを訪問しました。

これは、昨年3月にJICA沖縄国際センターと沖縄県教育委員会が締結した「連携覚書※」に基づく行動のひとつ。宮城次長らは、チッタゴンやダッカなどで、協力隊員の活動状況やJICAプロジェクトを視察し、現地の人々や日本大使館、JICA現地事務所と意見交換を行いました。視察を終えて帰国した二人は、次のように感想を述べました。

宮城清志 (県教育庁次長)

「県東京事務所勤務の時に、協力隊訓練所での隊員壮行会に2回出席したことがある。熱気に溢れていた。以来、彼らの現地での活動に興味を持っていた。今回、バンングラデシユで実際の活動を見ることができ、ラッキーだった。チッタゴンの市場では地元の人々から「ハイサイ」と呼びかけられた。沖縄の我如古隊員が広めたウチナーグチであり、うまく地域に溶け込んでいる様子。寛容な心を持つウチナーンチュの面目躍如の思いであった。

協力隊は、沖縄の教員の研修の場としても非常に有効であると実感した。」

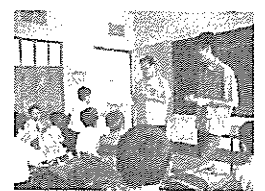
喜屋武浩司 (県教育庁指導主事)

「今回の訪問では、あらゆる方面の協力隊員



左から、喜屋武浩司県教育庁指導主事、我如古盛修協力隊員、宮城清志県教育庁次長、一人おいて斉藤祐巳OIC次長 (チッタゴンにて)

の活躍を実際に見て知ることができた。特に、沖縄出身のハンドボール指導者我如古隊員は、沖縄の「イチヤリバ兄弟」の精神と流暢なベンガル語を駆使して指導にあたっている姿が印象的だった。今後の国際理解教育推進に生かしていきたいと考えている。」



小学校を訪問する宮城教育庁次長 (中央)

## 津嘉山カウンセラー 県教育長にケニア出張報告

### 「現場で現職教員が求められている」

ケニアの協力隊事業を視察した沖縄国際センターの津嘉山朝祥協力隊進路相談カウンセラーは、9月21日、沖縄県教育庁に仲宗根用英教育長を訪ね、ケニア出張報告を行いました。

津嘉山カウンセラーは、何にもないところでがんばっている沖縄青年の活動を紹介したうえで、「現場では、教授法に熟練した日本の現職教員の派遣が求められている。教員研修の一環としても現職派遣制度の活用は一考に値する。」と感想を述べました。

また、沖縄県教員の協力隊への現職派遣枠(現行2名)の拡大、経験年限(現行5年以上)の緩和に関するJICAの要望も併せて伝えました。

仲宗根教育長は募集活動への協力確約と、現職派遣促進に向けて前向きに検討している旨回答しました。

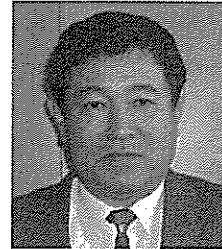
## 県教育委・JICA沖縄連携覚書

沖縄県教育委員会とJICA沖縄国際センターが、「沖縄県の国際交流拠点を担う人材の育成に係る国際理解教育・開発教育の拡充ならびに開発途上国に対する国際教育協力の推進に向けて連携協力を図る」ことを目的として、平成17年3月に交わした覚書。

この覚書に基づいて実施した主な事業は、平成17年11月までに、①出前講座(JICAが県内の学校に出向いて国際理解教育を実施すること)50件、②訪問学習(学校教員がJICAで研修(短時間)を受けること)29件、③教師海外派遣研修8名、④教育行政職員海外派遣研修2名、⑤国際理解教育指導者養成講座2回50名 などがある。

これらの活動が効果を奏し、平成17年度協力隊募集に6名の教員が応募した。

# はいむるぶし



## おいしいヒージャー料理を求めて アジアの国々の旅 後編

沖縄県中央食肉検査所 所長 平川宗隆

沖縄県青年海外協力隊を支援する会運営委員の平川宗隆は、沖縄県中央食肉検査所長、鹿児島大学大学院博士課程学生、博物館友の会副会長、etcと多くの肩書きを持つ。山羊とトイレを中心テーマに、精力的にアジア各国を調査に回っている。その調査旅行の一端を紹介してもらった。

### フィリピン

フィリピンでは、現地在住40年になる、やんばる出身のTさんに全面的にお世話になった。

山羊は解体する前に強制的に酔を飲ませる。肉を柔らかくするためらしい。フィリピンは山羊料理の宝庫で、実に様々なレシピがありうらしい。

特に珍しいのがパーパイータンという内臓料理だ。食べた草がまだ消化されず残っている胃内臓物をろくに洗いもせず、肺、心臓、腸などとともに大鍋で一旦茹でた後、一口大に切る。フライパンでニンニク、タマネギ、ショウガ、唐辛子を油で炒め、一口大に切った内臓と一緒に炒める。塩で味付けし、最後に何と胆汁を入れるのだ。ご想像頂きたい。緑色した内臓独特の匂いに、苦さと塩辛さが入り混じったこれまでに味わったことのない不思議な世界に引き込まれること受け合いだ。その他にもアドボ、カルデイレータ、キラウイン、サルビカウなど美味しい山羊料理が目白押しである。その夜はTさんの家に沖縄県人会の面々が集まり、ヒージャー料理で盛り上がった。



フィリピンの人と仲良くシェア 右端：筆者

### インドネシア

調査も台風やSARS騒ぎの合間をぬってなんとか終わりに近づいてきた。残るはインドネシアであるが、訪問前にバリ島でテロ騒ぎがあり、何となく雲行きが怪しくなったが、警戒が厳しいこの時期が最も安全と思い、決行することにした。

調査地はジャカルタから飛行機で1時間ほどのジョグジャカルタにした。ここは世界遺産に登録されている有名なポロブドールがあるところだ。ここも協力隊の帰国時に立ち寄った懐かしい場所である。

Mさんという沖縄出身の女性が現地の人と結婚し、住んでいるのでその方を頼りに出かけた。彼女の家の庭で山羊の解体を始めたが、隣近所の大人や子どもが集まり、お祭り騒ぎだ。極め付きは何と民俗楽器を持ち寄ってのガムランの演奏会であった。

インドネシアは回教国なので、バリ島以外では豚を食べない。羊や山羊が最もポピュラーな肉である。

私たちが幼い頃は、正月用の豚、山羊や鶏の自家用屠殺は身近で日常的に見られた風景であったが、現在ではまったく見られなくなつた。現代っ子はスーパーでパックさされている牛肉、豚肉、チキンからは、生きた牛、豚、鶏を想像することはできない。途中の行程が総て省かれている。家畜の命をいただいて私たちは生きていくのである。現在の日本では、その部分の教育が欠けている。今度の調査で訪問した国々ではこれがまだまだ健在である。見習いたい。話を元に戻そう。イスラム教では血液は利用しないので穴を掘って捨てる。皮は太鼓や毛皮に使うので、きれいに剥がす。料理は唐辛子を多



親から子へ、教えなくて伝統文化継承されていく

# はいむるぶし

用するので辛いですが、砂糖の産地なので甘口である。至る所に屋台があり、いつでもどこでも山羊料理を食べることができる。国民的な山羊料理は何といってもサテ・カンビンであろう。一口大の山羊肉を串刺しにしてタレをつけながら炭火で焼くのであるが、日本のヤキトリと味や作り方は寸分

異なる。その他にもカンビン・ナシゴレン（山羊肉入りチャーハン）、カンビン・ミーゴレン（山羊肉入り焼きそば）、山羊カレーなどがある。

山羊のことをカンビンと呼んでいるが、マレーシアやフィリピンでも同じである。山羊の来歴に由来することをも。

Mさんが事前に連絡をしてあったらしく、数名の協力隊員や専門家も集り、賑やかな昼食会となった。隊員のほとんどは女性で我々の頃とは違うことを改めて認識した。

アジアの国々の山羊料理はそれぞれに工夫を凝らした美味しいレシピがある。いつの日かこれを一堂に集めた、「世界の山羊料理の屋台村」を造ってみたいと思っている。

## インド

さて、山羊料理の調査の他にもう一つ途上国を訪ねる機会があったのは、私が所属している県立博物館友の会の海外研修である。この会の会員数は500名余の大所帯である。

県内や国内研修の他に毎年海外研修を行っている。で、研修テーマを研修地を決め、参加者を募るのであるが、たまたま、2003年にはインド研修で、講師として参加する機会を得た。帰国後29年経過しており、浦島太郎になっているが・・・幸いに沖縄ツーリストのウチナームークのバクシさんはデリー出身で、彼が添乗してくれ



サテ・カンビンは日本のヤキトリそっくり



サテ・カンビンをおぼる可愛い女の子

たので私の講師も無事務まった。一晩は彼の家に全員招待され、ホームパーティーを楽しんだ。訪問地はデリー、アグラ、ベナレス、ジャイプールで8泊9日間の短い訪問であったが、久しぶりのインドを堪能した。デリーはやはり都会でかなり変わっていたが、ベナレスやジャイプールは時計の針が止まっているかのようで、当時とまったく同じ風景であった。

## マレーシア

昨年はボルネオの自然観察の旅に参加した。ブルネイとマレーシア領のサバ州を訪問する8泊9日間の旅だった。ここは水上生活者とロングハウスに住んでいる人たちのトイレをみたいと思って参加したが、ロングハウスのトイレは今では水洗に変わっていたが、水上生活者のそれは今でも海にドボンである。それを魚が食べ、いずれ我々の口に入る仕組みは自然の理にかなっている。

## ブータン

今年6月にはあこがれのブータンを訪問する機会を得た。ブータンは協力隊在任中からインド外務省に対し、幾度となく入国を申請したが、認められなかった因縁の国である。29数年ぶりにやっと念願が叶ったので、行く前からそわそわだ。

ブータンは想像していたとおりの国だった。丹前のような民族衣装や建物も伝統を守り、ラマ教を信心する国民は物質的には恵まれないが、幸せ度は高いようにお見受けした。

## 終わりに

このように仕事の合間をぬって飛び回っている。これが私の一番のストレス解消法である。

早いもので公務員生活も残り数ヶ月となった。早く自由の身になってさらに羽ばたきたいと思っている。還暦を迎え体力の衰えをひしひしと感じている今日この頃であるが、途上国とのお付き合いはもうしばらく続きそうである。

(この原稿は、平成17年9月に提出されたもので、年の表現はその時点であることをご理解ください。また、世界ヤギ料理調査報告の詳細は「山羊の出番だ」に収録されています。編集部)

# はいむるぶし

## 行ってらっしゃい 出発ボランティア紹介



**大嶺麻子** ホンジュラス  
音楽 2005.11～2年間  
那覇市出身 協力隊  
トランペットと音楽を通じて、ホンジュラスとの文化交流を図り、日本、そして沖縄の文化を紹介したい。



**比嘉泰子** パラグアイ  
体育 2005.11～2年間  
那覇市出身 協力隊  
今まで培ったことをたくさんの人に伝えていき、そして、価値観の違う人たちと関わり合うことで、体育というものを追求したい。



**菅谷 洋** マレーシア 昆虫学  
2005.11～2年間  
那覇市出身 協力隊  
これまで培ってきた昆虫に対する知識を活かし、国際協力へ役立てたい。



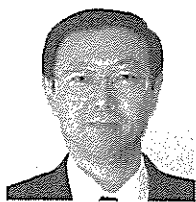
**長嶺聖子** バヌアツ 小学校教諭  
2005.11～2年間  
糸満市出身 協力隊  
沖縄とのつながりを大切にし、フットワーク軽く、常に柔軟な姿勢で活動に取り組みで行きたい。



**石原 晋** カンボジア 小学校教諭  
2005.11～2年間  
読谷村出身 協力隊  
どんな状況でも持ち前の実行力でがんばる。

## 参加者募集

地球市民の輪を広げよう  
**第十四回開発教育全国集会沖縄大会**  
一月二十八日 JICA沖縄国際センターにて  
申込先(ONC) tel:098-892-4758 fax:098-892-9908  
E-mail: kaihatsu@oki-ngo.or.jp



飛田賢治

東京都出身、89年JICA入団、89年～93年OIC研修課勤務、96年～99年JICAマレーシア事務所にてボランティア事業を担当。

2度目の沖縄赴任ですがこの間の沖縄の発展ぶりに驚いています。沖縄の協力隊事業の発展に努めますのでよろしく願います。

前回の沖縄赴任時に生まれた次男がまもなく高校受験です。今回は単身赴任です。

幸い教育関係をはじめとする関係の方々とも思いを共にすることができ、そして何よりボランティア経験者や支援する会の皆様との二人三脚での事業展開ができ、自分が期待した以上の事業基盤整備ができました。

そして、これからの事業形成を具体化させる段階です。ターゲットとする分野、そして協力地域・

沖縄をいつまでもすばらしい沖縄にするためにもより多くのウチナンチュが海外へでて、故郷を見つめてもらいたい、そんな沖縄発の海外ボランティア事業が実現することを願っています。



石井羊次郎

海外に雄飛するウチナンチュの心意気と、平和希求の沖縄の思いを形にできる沖縄ならではの国際協力が実現できれば

国を見定めて、組織的な派遣体制をつくりあげていくことが今後の大きな課題です。

こうした時期に沖縄を離れることは辛い思いと同時に、離れて支援しつつ見守る楽しさもあります。JICA本部でも大いに沖縄の可能性を売り込むつもりです。

沖縄の人は沖縄を離れて初めて沖縄の良さに気づくといえます。にわかウチナンチュの私も、人もモノも情報も過密な東京に戻って沖縄のすばらしさを改めて実感しています。

## 石井OIC業務第一チーム長 JICA本部に異動

沖縄国際センターで一年十一月にわたり協力隊等の業務を担当していた石井羊次郎さんが、一二月からJICA本部人間開発部勤務となりました。その後任として飛田賢治さんが赴任してきました。